

日蓮大聖人御書全集

ほんぞんもんどうしょう

本尊問答抄

新版
302
〜
315

ほんぞんもんどうしよう

本尊問答抄

こうあんがんねん

がつ

さい

じょうけんぼう

弘安元年('78)

9月

57歳

浄顯房

と い

問うて云わく、

まつだいあくせ

ぼんぷ

なにもの

ほんぞん

さだ

末代悪世の凡夫は何物をもつて本尊と定

むべきや。

こた

い

ほけきよう

だいもく

ほんぞん

答えて云わく、

法華經の題目をもつて本尊とすべし。

と い

問うて云わく、

きようもん

にんし

しゃく

い

いずれの經文、いずれの人師の釈にか出

でたるや。

こた

ほけきよう

だいし

ほつしほん

い

やくおう

答う。

法華經の第四の法師品に云わく「薬王よ。いたる

と

よ

じゆ

ところにて、もしは説き、もしは読み、もしは誦し、もし

か

きようがん

じゅう

ところ

みなまさ

は書き、もしは経卷の住するところの処には、皆応に

しつぽう

とう

た

きわ

こうこうこんじき

しやり

七宝の塔を起て、極めて高広嚴飾ならしむべし。また舍利を

あん

もち

ゆえん

なか

安んずることを須いず。所以はいかん。この中には、すで

によらい

ぜんしんいま

とううんぬん

ねはんぎよう

だいし

に如来の全身有せばなり」等云々。涅槃經の第四の

によらいしようほん

い

つぎ

かしよう

しよぶつ

し

如来性品に云わく「また次に、迦葉よ、諸仏の師とすると

ほう

ゆえ

によらい

くぎよう

くよう

ころは、いわゆる法なり。この故に、如来は恭敬・供養す。

ほうつね

ゆえ

しよぶつ

つね

うんぬん

法常なるをもつての故に、諸仏もまた常なり」云々。

てんだいだいし

ほつけざんまい

い

どうじよう

なか

よ

天台大師、法華三昧に云わく「道場の中において、好き

こうざ

し

ほけきよういちぶ

あんち

かなら

高座を敷き、法華經一部を安置せよ。またいまだ必ずしも

ぎようぞう

しやり

よ

きようてん

あん

もち

形像・舍利ならびに余の經典を安んずることを須いず。

ほけきよういちぶ

お

とううんぬん

ただ法華經一部のみを置け」等云々。

うたが

い

てんだいだいし

まかしかん

だいに

ししゅざんまい

疑つて云わく、天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の

ごほんぞん あみだぶつ

ふくうさんぞう

ほけきよう

かんち

ぎき

御本尊は阿弥陀仏なり。不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は、

しやか

たほう

ほけきよう

ほんぞん

なんじ

なん

釈迦・多宝をもつて法華經の本尊とせり。汝、何ぞこれら

ぎ そうい

の義に相違するや。

こた

い

わたくし

ぎ

かみ

い

答えて云わく、これ私の義にあらず。上に出だすところ

きようもん

てんだいだいし

おんしやく

まかしかん

ろの經文ならびに天台大師の御釈なり。ただし、摩訶止觀

ししゅざんまい

ほんぞん

あみだぶつ

かれ

じようざ

じようぎよう

の四種三昧の本尊は阿弥陀仏とは、彼は常坐・常行・

ひぎようひぎ

さんしゅ

ほんぞん

あみだぶつ

もんじゅもんぎよう

非行非坐の三種の本尊は阿弥陀仏なり。

文殊問経・

はんじゅざんまいきよう

しようかんのんぎようとう

にぜん

しよきよう

うち

般舟三昧経・請観音経等による。これは爾前の諸経の内、

みけんしんじつ

きよう

はんぎようはんぎざんまい

ふた

いち

未顕真実の経なり。半行半坐三昧には二つあり。一には

ほうどうきよう

しちぶつ

はちぼさつとう

ほんぞん

か

きよう

に

方等経の七仏・八菩薩等を本尊とす。彼の経による。二に

ほけきよう

しやか

たほうとう

ひ

たてまつ

ほつけざんまい

は法華経の釈迦・多宝等を引き奉れども、法華三昧をも

あん

ほけきよう

ほんぞん

ふくうさんどう

ほつけぎき

つて案ずるに、法華経を本尊とすべし。不空三蔵の法華儀軌

ほうとうほん

もん

ほけきよう

きようしゅ

ほんぞん

は、宝塔品の文によれり。これは法華経の教主を本尊とす。

ほけきよう

しようにい

法華経の正意にはあらず。

かみ

あ

ほんぞん

しやか

たほう

じつぼう

しよぶつ

上に挙ぐるところの本尊は、釈迦・多宝・十方の諸仏の

ごほんぞん ほけきよう ぎようじや しようい
御本尊、法華經の行者の正意なり。

と い にほんこく じっしゅう

問うて云わく、日本国に十宗あり。いわゆる俱舎・

じようじつ りつ ほつそう さんろん けこん しんごん じようど ぜん ほつけしゅう

成実・律・法相・三論・華嚴・真言・浄土・禅・法華宗な

しゅう みなほんぞん くしゃ じようじつ

り。この宗は、皆本尊まちまちなり。いわゆる俱舎・成実・

りつ さんしゅう れつおうじん しょうしやか ほつそう さんろん にしゅう

律の三宗は劣応身の小釈迦なり。法相・三論の二宗は

だいしやかぶつ ほんぞん けごんしゅう だいじょう 廬舎那ほうしん しゃか

大釈迦仏を本尊とす。華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦

によらい しんごんしゅう だいにちにょらい じようどしゅう あみだぶつ ぜんしゅう

如来。真言宗は大日如来。浄土宗は阿弥陀仏。禅宗にも

しゃか もち なん てんだいしゅう ひと ほけきよう ほんぞん

釈迦を用いたり。何ぞ天台宗に独り法華經を本尊とするや。

こた かれ ほとけ ほんぞん きよう ほんぞん

答う。彼らは仏を本尊とするに、これは經を本尊とす。

その義ぎあるべし。

問う。その義ぎ、いかな。ほとけ 仏と經きようといずれか勝れたるや。すぐ

答えて云わく、本尊とは勝れたるを用いるべし。こた い ほんぞん すぐ もち れい 例せば

儒家には三皇五帝を用いて本尊とするがごとく、じゆか さんこうごてい もち ほんぞん ぶつけ 仏家にも

また釈迦をもつて本尊とすべし。しやか ほんぞん

問うて云わく、と い しからば、汝、いかなぞ、なんじ 釈迦をもつてしやか

本尊とせずして、ほんぞん 法華經の題目を本尊とするや。ほけきよう だいもく ほんぞん

答う。こた 上に挙ぐるところの經釈を見給え。かみ あ きようしやく みたま わたくし ぎ 私わたしの義に

はあらず。しやくそん てんだい ほけきよう ほんぞん さだ たま 釈尊と天台とは、法華經を本尊と定め給えり。

まつだいいま

にちれん

ほとけ

てんだい

ほけきよう

末代今の日蓮も、
仏と天台とのごとく、
法華經をもつて

ほんぞん

ゆえ

ほけきよう

しやくそん

ふぼ

しよぶつ

本尊とするなり。
その故は、
法華經は釈尊の父母、
諸仏の

がんもく

しやか

だいにち

そう

じつぽう

しよぶつ

ほけきよう

眼目なり。
釈迦・大日、
総じて十方の諸仏は、
法華經より

しゆつしよう

たま

ゆえ

いま

のうしよう

ほんぞん

出生し給えり。
故に今、
能生をもつて本尊とするなり。

と

しようこ

問う。その証拠、いかん。

こた

ふげんぎよう

い

だいじようきようてん

しよぶつ

ほうぞう

答う。普賢經に云わく「この大乘經典は、
諸仏の宝蔵な

じつぽうさんぜ

しよぶつ

がんもく

さんぜ

もろもろ

によらい

しゆつしよう

り。十方三世の諸仏の眼目なり。
三世の諸の如来を出生

たね

とううんぬん

い

ほうごうきよう

しよぶつ

する種なり」等云々。
また云わく「この方等經は、
これ諸仏

まなこ

しよぶつ

よ

ごげん

ぐ

え

の眼なり。
諸仏はこれに因つて五眼を具することを得たま

えり。仏の三種の身は、方等より生ず。これ大法印なり。

ねはんかい いん かいちゆう よ さんしゅ ほとけ

涅槃海を印す。かくのごとき海中より能く三種の仏の

しょうじよう み しょう さんしゅ み にんてん ふくでん おうぐ

清浄の身を生ず。この三種の身は、人天の福田、応供の

なか さい とううんぬん きようもん ほとけ しょう ほとけきよう

中の最なり」等云々。これらの経文は、仏は所生、法華経

のうしよう ほとけ み ほとけきよう たましい すなわ

は能生。仏は身なり、法華経は神なり。しからば則ち

もくぞう えぞう かいげんくよう ほとけきよう

木像・画像の開眼供養はただ法華経にかぎるべし。しかる

いま もくえ にぞう 設 だいにちぶつげん いん しんごん

に、今、木画の二像をもうけて、大日仏眼の印と真言とを

かいげんくよう ぎやく

もつて開眼供養をなすは、もつとも逆なり。

と い ほけきよう ほんぞん だいにちによらい ほんぞん

問うて云わく、法華経を本尊とすると、大日如来を本尊と

すると、いずれか勝るるや。すぐ

こた　こうぼうだいし　じかくだいし　ちしようだいし　おんぎ
答う。弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義のごとくな

だいになちによらい　勝　ほけきよう　おと
らば、大日如来はすぐれ、法華経は劣るなり。

と　ぎ
問う。その義、いかん。

こた　こうぼうだいし　ひぞうほうやく　じゅうじゅうしん　い　だいはいちほつけ
答う。弘法大師の秘蔵宝鑰の十住心に云わく「第八法華、

だいくけごん　だいじゅうだいにちきよう　とううんぬん　あさ　ふか　い
第九華嚴、第十大日経」等云々。これは浅きより深きに入

じかくだいし　こんこうちようきよう　しよ　そしつじきよう　しよ　ちしようだいし
る。慈覚大師の金剛頂経の疏、蘇悉地経の疏、智証大師の

だいにちきようし　きとう　い　だいになちきようだい　い　ほけきようだいに　とううんぬん
大日経指帰等に云わく「大日経第一、法華経第二」等云々。

と　なんじ　こころ
問う。汝が意、いかん。

こた　しやかによらい　たほうぶつ　そう　じつぽう　しよぶつ　ごひようじよう
答う。釈迦如来・多宝仏、総じて十方の諸仏の御評定に

のたま　いこんとう　いつさいきよう　なか　ほつけ　もつと　だいいち

云わく「已今当の一切経の中に法華は最もこれ第一なり」

うんぬん
云々。

と　いま　にほんこくじゆう　てんだい　しんごんとう　しよそう　おうしん

問う。今、日本国中の天台・真言等の諸僧ならびに王臣・

ばんみんうたが　い　にちれんほつし　こうぼう　じかく　ちしようだいしとう

万民疑　つて云わく「日蓮法師めは弘法・慈覚・智証大師等

すぐ

に勝るべきか」。いかん。

こた　にちれん　はんきつ　い　こうぼう　じかく　ちしようだいしとう

答う。日蓮、反詰して云わく、弘法・慈覚・智証大師等は、

しやか　たほう　じつぽう　しよぶつ　すぐ　いち

釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか〈これ一〉。

いま　にほんこく　おう　たみ　きようしゆしやくそん　みこ

今、日本国の王より民までも、教主釈尊の御子なり。

しやくそん さいご ごゆいごん のたま

釈尊の最後の御遺言に云わく「法に依つて人に依らざれ」

とううんぬん ほつけ もつと だいいち

等云々。「法華は最も第一なり」と申すは法に依るなり。

さんだいしとう すぐ

宣 しよそう おうしん

しかるに、三大師等に勝るべしやとのたもう諸僧・王臣・

ばんみんないししよじゆう ぎゆうばとう

ふこう こ

万民乃至所従、牛馬等にいたるまで、不孝の子にあらずや

に

〈これ二〉。

と こうぼうだいし ほけきよう みたま

問う。弘法大師は法華經を見給わずや。

こえ こうぼうだいし いつさいきよう よ たま

なか ほけきよう

答う。弘法大師、一切經を読み給えり。その中に法華經・

けこんぎよう だいにちきよう せんじん しやうれつ よ たも

ほけきよう よ

華嚴經・大日經の浅深・勝劣を読み給うに、法華經を読み

たも よう い もんじゆしり

ほけきよう しよぶつによらい

給う様に云わく「文殊師利よ。この法華經は、諸仏如来の

ひみつ ぞう

しよきよう

なか

もつと

しも あ

秘密の蔵にして、諸経の中において最もその下に在り」。

よ たも よう い

やくおう

いまなんじ

っ

わ と

また読み給う様に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説く

しよきよう

きよう

なか

ほつけ

もつと

ところの諸経、しかもこの経の中において、法華は最も

だいさん

うんぬん

じかく

ちしやうだいし

よ

たも よう い

第三なり」云々。また慈覚・智証大師の読み給う様に云わ

しよきよう

なか

もつと

なか

あ

もつと

く「諸経の中において最もその中に在り」。また「最も

だいに

とううんぬん

これ第二なり」等云々。

しやかによらい

たほうぶつ

だいにちによらい

いっさい

しよぶつ

ほけきよう

釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏、法華経を

いっさいきよう

あいたい

と

宣

ほつけ

もつと

だいいち

一切経に相對して説いてのたまわく「法華は最も第一な

と

のたま

ほつけ

もつと

かみ

あ

うんぬん

り」。また説いて云わく「法華は最もその上に在り」云々。

詮ずるところ、釈迦・十方の諸仏と、慈覚・弘法等の三大師

と、いづれを本とすべきや。ただ、事を日蓮によせて、釈迦・

十方の諸仏には永く背いて三大師を本とすべきか、いかん。

問う。弘法大師は讃岐国の人、勤操僧正の弟子なり。

三論・法相の六宗を極む。去ぬる延暦二十三年五月、桓武

天皇の勅宣を帯びて漢土に入り、順宗皇帝の勅によつて

青竜寺に入つて、恵果和尚に真言の大法を相承し給えり。

恵果和尚は、大日如来よりは七代になり給う。人はかわれ

ども、法門はおなじ。譬えば、瓶の水をなお瓶にうつすが

だいにちによらい

こんごうさつた

りゆうもう

りゆうち

こんごうち

ふくう

ごとし。大日如来と金剛薩埵・竜猛・竜智・金剛智・不空・

けいか こうぼう

かめ こと

つた

ちすい おな

恵果・弘法との瓶は異なれども、伝うるところの智水は同じ

しんごん

き真言なり。

だいし

か

しんごん

なら

さんぜん

はとう

渡

にほん

この大師、彼の真言を習つて、三千の波濤をわたりて日本

こく

つ たも

へいぜい

さが

じゅんな

さんてい

授

たてまつ

国に付き給うに、平城・嵯峨・淳和の三帝にさずけ奉る。

い こうにんじゅうしねんしょうがつじゅうくにち

とうじ

こんりゅう

ちよく

去ぬる弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき勅を

たま

しんごん

ひほう

ぐつう

たも

ごきしちどう

給わつて、真言の秘法を弘通し給う。しかれば、五畿七道、

ろくじゅうろつかこく

ふた

しま

れい

しよ

六十六箇国・二つの島にいたるまでも、鈴をとり杵をにぎ

ひと

ひと

まつりゅう

る人、たれかこの人の末流にあらざるや。

また、慈覚大師は、下野国の人、広智菩薩の弟子なり。

だいどうさんねん おんとしじゅうご

でんぎようだいし みでし

大同三年、御歳十五にして伝教大師の御弟子となりて、

えいざん のぼ

じゅうごねん

あいだ

ろくしゅう

なら

ほつけ

しんごん

にしゅう

叡山に登って十五年の間、六宗を習い、法華・真言の二宗

なら つた

じょうわごねんごにつとう

かんど

かいしようにんし

ぎよう

を習い伝う。承和五年御入唐、漢土の会昌天子の御宇なり。

はっせん げんじよう

ぎしん

ほうがつ

しゅうえい

しおんとう

てんだい

しんごん

せきがく

法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学

あ たてまつ

けんみつ

にどう

なら

きわ

たも

うえ

こと

に値い奉って、顕密の二道を習い極め給う。その上、殊に

しんごん

ひきよう

じゅうねん

あいだ

く

つ

たも

だいにちにょらい

真言の秘教は十年の間、功を尽くし給う。大日如来より

くだい

かしようがんねん

にんみゆうてんのう

おんし

にんじゆ

さいこう

は九代なり。嘉祥元年、仁明天皇の御師なり。仁寿・斉衡

こんごうちようきよう

そしつじきよう

にきよう

しよ

つく

えいざん

そうじいん

に金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り、叡山に総持院を

ごんりゆう だいさん ざす たも てんだい しんごん
建立して第三の座主となり給う。天台の真言、これより

始
はじまる。

ちしようだいし さぬきのくに ひと てんちようしねん おんとしじゅうし えいざん

また智証大師は、讃岐国の人、天長四年、御年十四、叡山

のぼ ぎしんかしよう みでし たも にほんこく ぎしん

に登り、義真和尚の御弟子となり給う。日本国にては義真・

じかく えんちよう べつとうとう しよとく はつしゅう なら つた い にんじゆ

慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え、去ぬる仁寿

がんねん もんとくてんのう ちよく たま かんど い せんそうこうてい

元年に文徳天皇の勅を給わつて漢土に入り、宣宗皇帝の

だいちゆうねんちゆう はつせん りようしよかしようとう しよだいし しちねん あいだけんみつ

大中年中に、法全・良諤和尚等の諸大師に七年の間顕密

にきようなら さわ たま い てんあん にねん ごきちよう もんとく

の二教習い極め給いて、去ぬる天安二年に御帰朝。文徳・

せいわとう こうてい おんし げん とう つき

清和等の皇帝の御師なり。いづれも、現のため当のため、月

のごとく日のごとく、代々の明主、時々の臣民、信仰余り有
り、帰依怠りなし。故に、愚癡の一切、ひとえに信ずるば
かりなり。

誠に、「法に依って人に依らざれ」の金言を背かざるの外

は、いかでか、仏によらずして弘法等の人によるべきや。

詮ずるところ、その心いかん。

答う。夫れ、教主釈尊の御入滅一千年の間、月氏に仏法

の弘通せし次第は、先の五百年は小乗、後の五百年は

大乘。小大・権実の諍いはありしかども、顕密の定めは

微

かすかなりき。

ぞうほう

い

じゅうごねん

もう

かんど

ぶつぼうわた

はじ

像法に入つて十五年と申せしに、漢土に仏法渡る。始め

じゅどう

しやつきよう

じようろん

さだ

は儒道と釈教と諍論して定めがたかりき。されども、

ぶつぼう

漸

ぐつう

しょうだい

ごんじつ

じようろん 出

来

仏法ようやく弘通せしかば、小大・権実の諍論いできたる。

甚

そうい

かんど

ぶつぼうわた

されども、いたくの相違もなかりしに、漢土に仏法渡つて

ろつびやくねん

げんそうこうてい

ぎよう

ぜんむい

ごんごうち

ふくう

さんさんぞう

六百年、玄宗皇帝の御宇、善無畏・金剛智・不空の三三蔵、

がつし

い

たま

のち

しんごんしゅう

た

けごん

ほつけ

月氏より入り給いて後、真言宗を立てしかば、華嚴・法華

とう

しよしゅう

ほか

下

かみいちにん

しもばんみん

等の諸宗はもつての外にくだされき。上一人より下万民に

いた

しんごん

ほけけよう

うんदै

おも

至るまで、「真言には法華経は雲泥なり」と思いしなり。そ

のち とくそうこうてい ぎよう みようらくだいし もう ひと しんごん

の後、徳宗皇帝の御宇に、妙楽大師と申す人、「真言は

ほけきよう

強

劣

思

法華經にあながちにおとりたり」とおぼしめししかども、

甚 た

ほつけ

しんごん

しょうれつ

わきま

いたく立つることもなかりしかば、法華・真言の勝劣を弁

ひと

える人なし。

にほんこく

にんのうさんじゅうだいきんめい

おんとき

ひやくさいこく

ぶつぽうはじ

日本国は人王三十代欽明の御時、百済国より仏法始め

わた

はじ

かみ

ほとけ

じようろん

強

て渡りたりしかども、始めは神と仏との諍論こわくして

さんじゅうよねん

過

三十余年はすぎにき。

さんじゅうしだいすいこてんのう

ぎよう

しょうとくたいしはじ

ぶつぽう

ぐつう

三十四代推古天皇の御宇に、聖徳太子始めて仏法を弘通

たも

えかん

かんろく

ふら

しょうにん

ひやくさいこく

渡

し給う。恵灌・観勒の二りの上人、百済国よりわたりて

さんろんしゅう

ひろ

こうとく

ぎょう

どうしやう

ぜんしゅう

てんむ

三論宗を弘め、孝徳の御宇に、道昭、禪宗をわたす。天武

ぎょう

しらぎこく

ちほう

ほつそうしゅう

だいしじゅうしだい

の御宇に、新羅国の智鳳、法相宗をわたす。第四十四代

げんしやうてんのう

ぎょう

ぜんむいさんぞう

だいにちきやう

元正天皇の御宇に、善無畏三蔵、大日経をわたす。しか

ひろ

しやうむ

ぎょう

しんじやうだいとく

ろうべんそうじやうとう

れども弘めず。聖武の御宇に、審祥大徳・良弁僧正等、

けごんしゅう

にんのうしじゅうろくだいこうけんでんのう

ぎょう

とうだい

華嚴宗をわたす。人王四十六代孝謙天皇の御宇に、唐代の

がんじんわじやう

りっしゅう

ほつけしゅう

りつ

弘

ほつけ

鑑真和尚、律宗と法華宗をわたす。律をばひろめ、法華を

ひろ

ば弘めず。

だいごじゅうだいかんむてんのう

ぎょう

えんりやくにじゅうさんねんしちがつ

でんぎやう

第五十代桓武天皇の御宇に、延暦二十三年七月、伝教

だいし

ちよく

たま

かんど

わた

みやうらくだいし

みでしどうずい

大師、勅を給わつて漢土に渡り、妙楽大師の御弟子道邃・

ぎようまん あ たてまつ ほつけしゆう じよう え つた どうせんりつし

行満に値い 奉 っ て法華宗の定・慧を伝え、道宣律師に

ぼさつかい つた じゆんぎようわじよう もう ひと しんごん ひきよう なら

菩薩戒を伝え、順 曉 和尚と申せし人に真言の秘教を習い

つた にほんこく かえ たま しんごん ほつけ しょうれつ かんど

伝えて、日本国に帰り給いて「真言・法華の勝劣は、漢土

し 教 さだ がた おぼ

の師のおしえによつては定め難し」と思しめしければ、こ

だいにちきよう ほけきよう か しゃく しゃく ひ

こにして、大日経と法華経と、彼の釈とこの釈とを引き

なら しょうれつ はん たま だいにちきよう ほけきよう おと

並べて勝劣を判じ給いしに、「大日経は法華経に劣りたる

だいにちきよう しょ てんだい こころ わ しゆう い

のみならず、大日経の疏は天台の心をとりに我が宗に入

かんが たま

れたりけり」と勘え給えり。

のち こうぼうだいし しんごんきよう くだ いこん

その後、弘法大師、真言経を下されけることを遺恨とや

おぼ

しんごんしゅう

た

謀

ほけきよう

思しめしけん、真言宗を立てんとたばかりて、「法華経は

だいにちきよう

おと

けごんぎよう

おと

うんぬん

大日経に劣るのみならず、華嚴経に劣れり」と云々。あわ

じかく

ちしよう

えいぎん

おんじよう

ぎ

許

こうぼうだいし

れ、慈覚・智証、叡山・園城にこの義をゆるさずば、弘法大師

びやつけん

にほんこく

広

か

りようだいし

けごん

の僻見は日本国にひろまらざらまし。彼の両大師、華嚴・

ほつけ

しようにれつ

許

ほつけ

しんごん

しようにれつ

なが

法華の勝劣をばゆるさねど、法華・真言の勝劣をば永く

こうぼうだいし

どうしん

ぞんがい

もと

でんぎようだいし

だいおんてき

弘法大師に同心せしかば、存外に本の伝教大師の大怨敵と

なる。

のち

にほんこく

しよせきとくとう

おのおのち

えたか

その後、日本国の諸碩徳等、各智慧高くあるなれども、

か

さんだいし

超

いま

しひやくよねん

あいだ

にほんいちどう

彼の三大師にこえざれば、今に四百余年の間、日本一同に

しんごん ほけきよう すぐ

さだ お

「真言は法華經に勝れけり」と定め畢わんぬ。たまたま

てんだいしゆう なら hitobito しんごん ほつけ およ よしそん

天台宗を習える人々も、真言は法華に及ばざるの由存せど

てんだい ぎす おむろとう こうき 恐 もう

も、天台の座主・御室等の高貴におそれて申すことなし。

ぎ 弁 辛

あるはまた、その義をもわきまえぬかのゆえに、からくし

どう ぎ いっこうしんごんし 思

て同の義をいえば、一向真言師は、「さること、おもいもよ

らず」とわらうなり。

にほんこくじゆう すうじゆうまん じしや みな しんごんしゆう

しかれば、日本国中に数十万の寺社あり。皆、真言宗

ほつけしゆう なら しんごん しゆ ほつけ

なり。たまたま法華宗を並ぶとも、真言は主のごとく、法華

しよじゆう けんかく hito しんちゆう いちどう

は所従のごとくなり。もしは兼学の人も、心中は一同に

しんごん

ざす

ちょうり

けんぎよう

べつとう

いつこう

しんごん

真言なり。座主・長吏・検校・別当、一向に真言たるうえ、

かみ この

しもみな

従

いちにん

漏

上に好むところ下皆したがうことなれば、一人ももれず

しんごんし

にほんこく

くち

ほけきようさいだいいち

真言師なり。されば、日本国、あるいは口には法華経最第一

読

こころ

さいだいに

さいだいさん

しん く

とはよめども、心は最第二・最第三なり。あるいは身・口・

いとも

さいだいに

さん

さんごうそうおう

さいだいいち

よ

ほけきよう

意共に最第二・三なり。三業相応して最第一と読める法華経

ぎようじゃ

しひやくよねん

あいだいちにん

のうじしきよう

の行者は、四百余年が間一人もなし。まして「能持此経」

ぎようじゃ

覚

によらいげんさい

ゆたおんしつ

の行者は、あるべしともおぼえず。「如来現在・猶多怨嫉・

きようめつどい

しゅじよう

かみいちにん

しもばんみん

況滅度後」の衆生は、上一人より下万民にいたるまで

ほけきよう

だいおんてき

法華経の大怨敵なり。

にちれん とうかいどうじゅうごかく うち だいじゅうに あいあ

しかるに、日蓮は東海道十五箇国の内、第十二に相当た

あわのくにながさのこおりとうじょうのこうかたうみ あま こ しょうねんじゅうに

る安房国長狭郡東条郷片海の海人が子なり。生年十二

おな べこう うち せいちようじ もう やま 罷 のぼ じゅう おんごく

同じき郷の内、清澄寺と申す山にまかり登り住しき。遠国

てら 名 そうら しゅがく ひと

なるうえ、寺とはなづけて候えども、修学の人なし。しか

ずいぶんしよく しゅぎよう がくもん そうら

るに、随分諸国を修行して学問し候いしほどに、我が身は

ふしよう ひと じっしゅう がんき しょうれつ

不肖なり、人はおしえず。十宗の元起・勝劣たやすく

弁 ぶつぼさつ きしょう いっさい

わきまえがたきところ、たまたま仏菩薩に祈請して、一切

きようろん かんが じっしゅう あ くしやしゅう せんごん

の経論を勘えて十宗に合わせたるに、俱舎宗は、浅近な

いちぶん しょうじょうきよう そうとう に じょうじっしゅう

れども一分は小乗経に相当するに似たり。成実宗は、

だいしようけんぞう

みようご

りっしゅう

もと

しょうじょう

なかごろ

だいじょう

大小兼雜して謬誤あり。律宗は、本は小乗、中比は大乗、

いま いったう だいじょうしゅう

でんぎようだいし りっしゅう

今は一向に大乘宗とおもえり。また伝教大師の律宗あ

べつ なら

り。別に習うことなり。

ほつそうしゅう

みなもと

ごんだいじょうきよう

なか

せんごん

ほうもん

法相宗は、源、権大乘経の中の浅近の法門にてあり

しだい

ぞうちよう

ごんじつ

なら

けつく

か

しゅうじゅう

けるが、次第に増長して権実と並び、結句は彼の宗々を

う やぶ

ぞん

たと

にほんこく

しょうぐん

まさかど

すみとも

打ち破らんと存ぜり。譬えば、日本国の將軍、將門・純友

とう

しも

い

かみ

やぶ

等のごとし。下に居て上を破る。

さんろんしゅう

ごんだいじょう

くう

いちぶん

われ

三論宗もまた権大乘の空の一分なり。これも「我は

じつだいじょう

実大乘」とおもえり。

けごんしゆう

ごんだいじよう

い

よしゆう

勝

たと

華嚴宗は、また権大乘と云いながら余宗にまされり。譬

せつしろう

かんぱく

ほけきよう

かたき

えば、摂政・関白のごとし。しかれども、法華経を敵と

た

しゆう

ゆえ

しんか

み

だいおう

じゆん

なして立つる宗なる故に、臣下の身をもつて大王に順ぜ

んとするがごとし。

じようどしゆう

もう

ごんだいじよう

いちぶん

ぜんどう

ほうねん

浄土宗と申すも、権大乘の一分なれども、善導・法然が

謀

賢

しよきよう

あ

かんぎよう

くだ

たばかりかしこくして、諸経をば上げ観経をば下し、

しようぞう

き

あ

まつぼう

き

くだ

まつぼう

き

あいかな

正像の機をば上げ末法の機をば下して、末法の機に相叶え

ねんぶつ

と

い

き

きよう

う

いちだい

しようぎよう

る念仏を取り出だして機をもつて経を打ち、一代の聖教

うしな

ねんぶつ

いちもん

た

たと

こころ

賢

を失つて念仏の一門を立てたり。譬えば、心かしこくし

て身は卑しき者が、身を上げて心はかなきものを敬つて、

賢人をうしなうがごとし。

禪宗と申すは、「二代聖教の外に真実の法有り」と云々。

譬えば、おやを殺して子を用い、主を殺せる所従の、しか

もその位につけるがごとし。

真言宗と申すは、一向に大妄語にて候が、深くその

根源をかくして候えば、浅機の人あらわしがたし。一向に

誑惑せられて数年を経て候。まず天竺に真言宗と申す

宗なし。しかるに「有り」と云々。その証拠を尋ぬべきな

せん

だいにちきよう

渡

ほけきよう

ひ

り。詮ずるところ、大日経ここにわたれり。法華経に引き

む

しようれつ

み

だいにちきよう

ほけきよう

向かえてその勝劣これを見るところに、大日経は法華経

しちじゅうげれつ

きよう

しようこ

か

きよう

きよう

ふんみよう

より七重下劣の経なり。証拠は、彼の経、この経に分明

ひ

なりへここにこれを引かず。しかるを、あるいは云わく

ほけきよう

さんじゅう

しゅくん

にじゅう

しゅくん

「法華経に三重の主君」、あるいは「二重の主君なり」と

うんぬん

ほか

だいびやつけん

たと

りゅうそう

げれつ

み

云々。もつての外の大僻見なり。譬えば、劉聡が下劣の身

びんてい

うま

くち

ちようこう

たみ

み

よこ

として愍帝に馬の口をとらせ、趙高が民の身として横しま

ていい

即

か

てんじく

だいまんばらもん

に帝位につきしがごとし。また彼の天竺の大慢婆羅門が

しやくそん

とこ

ざ

かんど

し

ひと

釈尊を床として坐せしがごとし。漢土にも知る人なく、

にほん

怪

しひやくよねん

送

日本にも、あやしめずして、すでに四百余年をおくれり。

ぶつぼう

じやしようみだ

おうぼう

ようや

つ

かくのごとく仏法の邪正乱れしかば、王法も漸く尽き

けつく

くに

たこく

破

ぼうこく

ぬ。結句は、この国、他国にやぶられて亡国となるべきな

にちれんひと

かんが

し

ゆえ

ぶつぼう

おうぼう

り。このこと日蓮独り勘え知れる故に、仏法のため、王法

しよきよう

ようもん

あつ

いっかん

しよ

つく

こ

のため、諸経の要文を集めて一卷の書を造る。よつて故

さいみようじのにゆうどうどの

たてまつ

りつしようあんこくろん

な

しよ

最明寺入道殿に奉る。立正安国論と名づけき。その書

もう

ぐにん

し

がた

せん

にくわしく申したれども、愚人は知り難し。詮ずるところ、

げんしよう

ひ

もう

現証を引いて申すべし。

にんのうはちじゆうにだいお

きほうおう

もう

おうましま

い

そもそも人王八十二代隱岐法皇と申す王有しき。去ぬる

じようきゆうさんねんたいさいかのえみごがつじゆうごにち

いがのたろうほんがんみつすえ

う

承久三年太歳辛巳五月十五日、伊賀太郎判官光季を打ち

と かまくら よしとき 打 たま

かどで

捕りまします。鎌倉の義時をうち給わんとての門出なり。

ごきしちどう つわもの め

そうしゅうかまくら

ごんのだいぶよしとき

やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の権大夫義時を

う たま

かえ よしとき 負 たま

打ち給わんとし給うところに、還つて義時にまけ給いぬ。

けつく わ み おきのくに 流

たいしににん

さどのくに

結句、我が身は隠岐国にながされ、太子二人は佐渡国・

あわのくに

たま くぎようしちにん

くび 刎

阿波国にながされ給う。公卿七人はたちまちに頸をはねら

負 たま

こくおう み

れてき。これはいかにとしてまけ給いけるぞ。国王の身と

たみ よしとき う たま

たか きじ 捕

ねこ

して民のごとくなる義時を打ち給わんは、鷹の雉をとり、猫

ねずみ は

ねこ

食

の鼠を食むにてこそあるべけれ。これは猫のねずみにくら

われ、鷹たかの雉きじにとられたるようなり。

じようぶく ちらら っ

しかのみならず、調伏、力を尽くせり。いわゆる、天台

てんだい

ざす じえんそうじよう しんごん ちようじゃ にんなじ おむろ おんじようじ ちようり

座主・慈円僧正、真言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長吏、

そう しちだいじ じゆうごだいじ ちえ かいぎよう にちがつ

ひほう

総じて七大寺・十五大寺、智慧・戒行は日月のごとく、秘法

こうぼう じかくとう さんだいし しんちゆう じんみつ だいほう じゆうごだん

は弘法・慈覚等の三大師の心中の深密の大法、十五壇の

ひほう ごがつじゆうくにち ろくがつ じゆうよつか

汗

秘法なり。五月十九日より六月の十四日にいたるまで、あせ

流 脳 碎 おこな

をながし、なずきをくだきて行いき。

さいご おむろ ししんでん にほんこく 渡

最後には、御室、紫宸殿にして、日本国にわたりていま

さんど おこな だいほう ろくがつようかはじ おこな

だ三度までも行わぬ大法、六月八日始めてこれを行うほ

おな

じゅうよつか

かんとう

へいぐん

うじ

せた

押

渡

どに、同じき十四日に、関東の兵軍、宇治・勢多をおしわた

らくよう

う

い

さんいん

い

ど

たてまつ

ここのえ

ひ

して洛陽に打ち入って、三院を生け取り奉って、九重に火

はな

いちじ

しょうしつ

さんいん

さんごく

るざい

たてまつ

を放って一時に焼失す。三院をば三国へ流罪し奉りぬ。

くぎようしちにん

くび

斬

また公卿七人は、たちまちに頸をきる。しかのみならず、

おむろ

ごしよ

お

い

さいあい

でし

しょうに

せいたか

もう

御室の御所に押し入って、最愛の弟子の小児・勢多伽と申せ

責

出

つい

くび

斬

おむろた

おも

しをせめいだして、終に頸をきりにき。御室堪えずして思い

じ

たま

お

はは

し

わらべ

し

祈

死に給い畢わんぬ。母も死に、童も死ぬ。すべてこのいの

侍

ひと

幾

せんまん

知

し

りをたのみし人、いく千万ということをしらず死ににき。

生

甲斐

おむろ

いの

はじ

たま

ろくがつ

たまたまいきたるもかいなし。御室、祈りを始め給いし六月

ようか

おな

じゅうよつか

中

数

しちにち

まん

八日より、同じき十四日まで、なかをかぞうれば、七日に満

ひ

じける日なり。

じゅうごだん

ほう

もう

いちじきんりん

してんのう

ふどう

この十五壇の法と申すは、一字金輪・四天王・不動・

だいいとく

てんぼうりん

によいりん

あいぜんおう

ぶつげん

ろくじ

こんごうどうじ

大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼・六字・金剛童子・

そんしょうおう

たいげん

しゅごきやうとう

だいほう

ほう

せん

こくてき

尊星王・太元・守護経等の大法なり。この法の詮は、国敵・

おうてき

もの

こうぶく

いのち

め

と

たましい

みつ

王敵となる者を降伏して、命を召し取って、その魂を密

ごんじやうど

遣

ほう

ぎやうじや

ひとびと

かる

厳浄土へつかわすという法なり。その行者の人々もまた軽

てんだいざす

じえん

とうじ

おむろ

みい

じやうじゆういん

そうじやう

からず。天台座主・慈円、東寺、御室、三井の常住院の僧正

とう しじゆういちにん

ばんそうとうさんびやくよにん

うんぬん

等の四十一人、ならびに伴僧等三百余人なり云々。

ほう

ぎょうじや

よ じょうだい

法といい、行者といい、また代も上代なり。いかにと

負 たま

勝

そくじ

してまけ給いけるぞ。たといかつことこそなくとも、即時に

負

恥 遭

まけおわりて、かかるはじにあいたりけること、いかなる

故

よにん

知

こくしゆ

たみ う

ゆえということを、余人いまだしらず。国主として民を討た

たか とり 捕

負 たも

んこと、鷹の鳥をとらんがごとし。たといまけ給うとも、

いちねんにねん

じゅうねんにじゅうねん

支

ごがつじゅうごにち

一年二年、十年二十年もささうべきぞかし。五月十五日に

起

ろくがつじゅうよつか

負 たま

さんじゅうよにち

おこりて六月十四日にまけ給いぬ。わずかに三十余日なり。

ごんのだいぶどの

か

知

きとう

構

権大夫殿はこのこと兼ねてしらねば、祈禱もなし、かまえ

もなし。

にちれん しょうち

かんが

ゆえ

しかるに、日蓮、小智をもつて勘えたるに、その故あり。

か しんごん じゃほう ゆえ ひがごと

いちにん

いわゆる彼の真言の邪法の故なり。僻事は、一人なれども

ばんこく 煩 いちにん ぎょう

いつこくにこく 破

万国のわずらいなり。一人として行ずとも、一国二国やぶ

さんびやくよにん こくしゆ

ほけきよう

れぬべし。いわんや三百余人をや。国主とともに法華經の

だいおんてき 亡 だいあくほう

大怨敵となりぬ。いかでかほろびざらん。かかる大悪法、

年 経 漸 かんとう 落 くだ しよどう べつとう ぐそう

としをへて、ようやく関東におち下つて、諸堂の別当・供僧

れんれん ぎよう もと へんいき ぶし きようほう

となり、連々と行ぜり。本より辺域の武士なれば、教法の

じゃしよう し さんほう 崇 おも

邪正をば知らず。ただ三宝をばあがむべきこととばかり思

じねん もち 漸 ねんすう

うゆえに、自然としてこれを用いきたりて、ようやく年数を

ふ

いまたこく

責

被

くに

亡

経るほどに、今他国のせめをこうむつて、この国すでにほろ

かんとうはちかこく

えいざん

とうじ

おんじよう

びなんとす。関東八箇国のみならず、叡山・東寺・園城・

しちじとう

ざす

べつとう

みな

かんとう

おん

計

七寺等の座主・別当、皆、関東の御はからいとなりぬるゆ

おきのほうおう

だいあくほう

だんな

な

さだ

たま

えに、隠岐法皇のごとく、大悪法の檀那と成り定まり給い

ぬるなり。

こくしゆ

だいしよう

みな

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してん

国主となることは、大小、皆、梵王・帝釈・日月・四天

おん 計

ほけきよう

おんてき

さだ

たま

の御はからいなり。法華経の怨敵となり定まり給わば、た

じばつ

由

ちか

たま

にんのう

ちまちに治罰すべきよしを誓い給えり。したがつて、人王

はちじゆういちだいいんとくてんのう

だいじようのにゆうどう

いちもんよりき

ひようえのすけ

八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して、兵衛佐

よりとも じようぶく

えいざん

うじでら

さだ

さんおう

うじがみ

頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め、山王を氏神

侍

あんとか

さいかい

しず

みよううん

よしなか

ころ

とたのみしかども、安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺さ

いちもんみないちじ

滅

お

だいにど

こんど

る。一門皆一時にほろび畢わんぬ。第二度なり。今度は

だいさんど 当

第三度にあたるなり。

にちれん

諫

おんもち

しんごん

あくほう

日蓮がいさめを御用いなくて、真言の悪法をもつて

だいもうこ じようぶく

にほんこくかえ

じようぶく

大蒙古を調伏せられば、日本国還つて調伏せられなん。

かえ

ほんにん

つ

と

もう

「還つて本人に著きなん」と説けりと申すなり。しからば

すなわ

ばち

りしよう

おも

ほけきよう

過

ほとけ

成

則ち、罰をもつて利生を思うに、法華經にすぎたる仏にな

だいどう

げんぜ

きとう

ひようえのすけどの

ほけきよう

る大道はなかるべきなり。現世の祈禱は、兵衛佐殿、法華經

どくじゆ げんしよう
を讀誦する現証なり。

どうり ぞん
この道理を存ぜることは、
ふぼ ふぼ ししよう ごおん
父母と師匠との御恩なれば、

ふぼ かこ たま お
父母はすでに過去し給い畢わんぬ。
こどうぜんのごぼう ししよう
故道善御房は師匠にて

ほけきよう ゆえ じとう 恐 たま
おわしまししかども、法華經の故に地頭におそれ給いて、

しんちゆう ふびん 思 そと 敵
心中には不便とおぼしつらめども、外にはかたきのように

憎 たま のち しん たま 聞
にくみ給いぬ。後にはすこし信じ給いたるようにきこえし

りんじゆう
かども、臨終にはいかにやおわしけん、おぼつかなし。地獄
じごく

しやうじ 離
までは、よもおわせじ。また生死をはなるることはあるべ

覺 ちゆうう 漂
しとおおぼえず。中有にやただよいましますらんなげか
歎

し。

きへん

じとう

怒

とき

ぎじようぼう

せいちようじ

い

貴辺は、地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺を出で

ひと

なん

ほけきよう

ごほうこう

ておわせし人なれば、何となくとも、これを法華經の御奉公

思

しやうじ

離

たも

とおぼしめして、生死をはなれさせ給うべし。

ごほんぞん

せそん

置

たま

のち

この御本尊は、世尊説きおかせ給いて後、

にせんにひやくさんじゅうよねん

あいだ

いちえんぶだい

うち

弘

二千二百三十余年が間、一閻浮提の内にいまだひろめたる

ひとそちら

かんど

てんだい

にほん

でんぎよう

知

人候わず。漢土の天台、日本の伝教、ほぼしろしめして、

弘

たま

とうじ

広

たも

いささかひろめさせ給わず。当時こそひろまらせ給うべき

とき

そちら

きよう

じようぎよう

むへんぎようとう

い

時にあたりて候え。経には上行・無辺行等こそ出でて

弘 たも み そうら み たま

ひろめさせ給うべしと見えて候えども、いまだ見えさせ給

にちれん ひと そうら 心 得 そうら

わず。日蓮はその人に候わねども、ほぼこころえて候え

じゆ ぼさつ い たも くち 粗 々

ば、地涌の菩薩の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら

もう きようめつどご 矛 先 あ そうろう

申して、況滅度後のほこさきに当たり候なり。願わくは、

くどく ふ ぼ ししよう いつさいしゆじよう えこう たてまつ

この功德をもつて、父母と師匠と一切衆生に回向し奉ら

きしようつかまつ そうろう

んと祈請仕り候。

むね 知 ごふしん か 送

その旨をしらせまいらせんがために、御不審を書きおく

そうろう たじ 捨 ごほんぞん みまえ

りまいらせ候に、他事をすてて、この御本尊の御前にし

いっこう ごせ 祈 たま そうら もう

て、一向に後世をものらせ給い候え。またこれより申さ

んと存ぞんじ候そうろう。

いかにも御房ごぼうたち、

はから計い申もうさせ給たまえ。

日蓮にちれん
花押かおう